

第8回 国際サゴヤシシンポジウムを終えて

見富健志

千葉大学大学院自然科学研究科 〒271-8510 千葉県松戸市松戸 648

2005年8月4日～6日の3日間、第8回国際サゴヤシシンポジウムが行われた。開催地はインドネシア最東端、ジャヤプラ。国民の約85%がイスラム教であるインドネシアにおいて、ここでは多くの人々がキリスト教徒であり、教会が立ち並ぶ町並みは訪れた人々に他のインドネシアの地域とは異なる新鮮な印象を与える。

シンポジウムは8月4日から美しい海岸に面するパプア州庁舎で行われた。会場は主催スタッフにより入念に準備されており、国際シンポジウムを行うにふさわしい会場が用意されていた。開会式ではインドネシア林業大臣の挨拶があったため、大勢の取材陣が会場に会場にいた。そのようなことも相俟って盛大な開会式であった。ただし、大臣の到着が遅れたために多少のスケジュール変更を伴った。皮肉なことにこれを皮切りにその後もスケジュール変更が生じてしまったが、主催者と発表者の協力により、問題なくシンポジウムは続けられた。

参加者はインドネシア、日本、マレーシア、オランダ、タンザニアの5カ国より作物学、林学、土壌学、人類学、食品学などを専門とする多彩な研究者が集まった。口頭発表34報、ポスター発表6報が8月4日～5日の2日間にわたり行われ、サゴヤシに関するマネジメント、品種、生息地域、微生物、潜在能力、廃棄物利用、作業機械、食料化など、様々な角度からの研究発表と活発な議論が行われた。参加者の専門分野が偏りがちなシンポジウムにおいて本会ほど多様な人材が集まるシンポジウムは珍しく思える。多彩な分野の研究者が注目するほどサゴヤシは重要かつ有用な資源であることを痛感させられた。なお、私自身はサゴ生育地に類似した湿地環境における窒素動態について発表する機会を

与えていただき、発表後、多くの有意義な助言を得ることが出来た。

シンポジウム期間中の食事や休憩時間には現地食材が並ぶだけでなく、サゴヤシで出来たケーキやお菓子なども用意され、味覚でもサゴヤシを感じる事ができた。

8月5日、今回の学会の総括が行われた後、パプア州知事を迎え閉会式が行われた。閉会式ではシンポジウム関係者と参加者への感謝、未来におけるサゴヤシ研究の重要性、サゴヤシを産業として促進させることの必要性などが説かれた。

8月6日に行われたエクスカージョンでは、まず、サゴヤシ生息域を山頂から望むため、山に登った。しかし、生憎の悪天候であったため、雄大なサゴヤシ生息域を山頂から望むことはできなかった。その後、小船に分乗してサゴヤシを主要産業として生活が営まれているヨホイ村を訪れた。村民の伝統的ダンスと歌での歓迎、村長の涙ながらの歓迎の挨拶を受けた後、サゴヤシの伐採からデンプンの抽出までの過程を直に見せていただいた。サゴヤシが倒れる際の大きな音と地面の揺れ、人々の力強い作業風景には目を見張るものがあった。実際にサゴヤシの生育地、サゴヤシの利用を見学・体験できたことは参加者にとって大きな財産になったことを信じて疑わない。そして、いかなる崇高な学術文書や偉人の研究発表よりも現場を見ることが一番の勉強になることを改めて認識できた。

今回のシンポジウムでは研究発表だけでなく、五感を使ってサゴヤシを学ぶことが出来た。そしてサゴヤシの有用性、今後の課題などを改めて認識させられた。

次の第9回国際サゴヤシシンポジウムは2年後

にフィリピンのレイテで行われることが決まった。今回シンポジウムが行われたジャヤプラに負けず劣らずサゴヤシが生育している地帯であり、また美しい地とのことである。多くの方々に是非とも奮って参加していただき、サゴヤシに関する研究がより活発に行われることを期待したい。



シンポジウム発表風景



でんぶん採取工程の一場面（エクスカベーション）



閉会式の様子